

IAQGワシントンDC会議について

1. はじめに

IAQG（International Aerospace Quality Group）ワシントンDC会議が、2025年10月13日（月）～16日（木）にワシントンDC近郊のヴァージニア州レストンにて開催された。これに先立ち、9100規格関連の会議は10月9日（金）から始まっており、日本からも担当メンバーが参加した。

全体で200名ほどが現地参加した中で、JAQG（Japanese Aerospace Quality Group）からも数多くのメンバーが対面およびオンラインで会議に参加した。レストンは最寄りのワシントンダレス国際空港から数マイルの位置にあり、日本出発時は10月とは思えないほど暑い日が続いていたが、当地は秋らしく、ひんやりと乾燥した大陸的な気候であった。

今回は懸案であった認証制度移行の日程が明確化されるなど、進展がみられた。

以下に会議の様子について示す。

2. IAQGの概要および会議概要

国際航空宇宙品質グループ（IAQG）は、世界の航空宇宙及び防衛関連企業が互いの信頼に基づいて強力な協力体制を構築・維持することにより、価値創造の流れの全段階において品質の著しい改善とコストの削減を実現する活動を推進するために1998年に設立された民間非営利組織である。その構成は、アメリカ地区のAAQG（Americas Aerospace Quality Group）、アジア太平洋地区のAPAQG（Asia-Pacific Aerospace Quality Group）、ヨーロッパ地区のEAQG（European Aerospace Quality Group）であるが、今後はIAQGの名称に統一し、IAQG-America、IAQG-Europe、IAQG-Asia-Pacificと称される予定である。

JAQGはAPAQGの主たるメンバーであり、航空宇宙における品質マネジメントの最新状況を把握するとともに、日本の航空宇宙産業界の意見を国際品質規格や国際航空宇宙認証制度に反映させるべく活動を行っている。



会議会場（Hyatt Regency Reston）

SJACはJAQG事務局に加えてAPAQG事務局の役割も担っている。

いずれの組織も常勤専従職員はおらず、航空宇宙関連企業の従業員により構成されており、各企業のボランティア活動により支えられている。

IAQGの主な活動目的は次の3点である。

- ・ 航空宇宙業界独自規格（9100シリーズ規格）の制定及び維持
- ・ 品質改善のためのガイダンス資料の提供
- ・ 9100シリーズ認証制度の開発及び維持

会議は、各種分科会から始まり、IAQGプレジデント及び各セクターのリーダーによる執行委員会（Executive Committee）、Voting Member（以下、投票メンバー）が参加するOperational Councilと続き、最終日にIAQG総会（General Assembly）が行われ、中長期戦略の検討及び作業進捗状況の確認・調整等が行われる。これらについては後述する。

IAQG全体で27社の投票メンバーのうち、JAQGは4社のメンバーを有し、ほぼ全ての会議へ積極的に参画しており、我が国及びアジ

ア太平洋地区の代表としての意見をIAQGに提案及び反映する活動を行った。

以下、実際の時系列とは異なるが、理解しやすさを第一義として、まず総会の概要について述べ、続いて各種分科会について述べる。

（1）総会（General Assembly）

（報告者：城福隆司 日本航空宇宙工業会）

総会は、最終日の午前に開催される。IAQGプレジデントによる執行委員会報告に始まり、各セクター（AAQG、EAQG、APAQG）のリーダーからの活動報告、規格の開発状況、SCMH（Supply Chain Management Handbook）およびAIMM（Aerospace Industry Maturity Model）等のユーザー支援ツールの開発状況報告、COT（Certification Oversight Team）活動報告などが行われた。

執行委員会報告ではIAQGプレジデントEric Jefferies氏より、航空機のシステムになぞらえて、緊急事態では各搭乗員が各人の役割を理解し行動する必要があるということから、IAQGにおいても同様に各人が状況を



IAQG組織 (<https://jaqg.sjac.or.jp/about/index.html>)



総会（General Assembly）の様子

理解し行動する必要があるとの講話がなされ、セクター報告では、各セクターリーダーより、メンバーの加入状況、活動報告がなされた。APAQGからは、APAQGリーダーである川崎重工業(株)の上原氏より報告がなされた。

総会の決議事項は下記の3件となっており、いずれも27名の投票メンバー（AAQG：10名、EAQG：10名、APAQG：7名）により承認された。

1. 2025年4月のバルセロナ会議議事録の承認

2. 2026年IAQG予算の承認

3. IAQG Presidentの任期延長

なお、APAQG投票メンバーのうち、4名（(株)IHI、三菱重工業(株)、川崎重工業(株)、(株)SUBARU）はIAQGから出席されている。

(2) 執行委員会

（報告者：上原美基 川崎重工業(株)）

執行委員会は、IAQG会長、各セクターリー

ダー、財務管理チームリーダー等から構成され、IAQGの組織運営に関連する重要事項を討議する委員会（月例）である。

今回は、下記の5点について議論した。

①IAQG財務方針

②航空宇宙認証審査員システム構想

③航空宇宙品質マネジメントシステム認証データベース OASIS*のセキュリティ強化方針

④IAQG内部手順レビュー

⑤正会員向け2025年予算執行状況報告資料確認

*：Online Aerospace Supplier Information System：IAQGが開発したWebベースのデータベースシステムであり、全世界の9100、9110、9120認証取得組織の情報が登録されている

(3) IAQG Operations Council

（報告者：高橋伸英 (株)SUBARU）

IAQG Operations Council（以後、OPC会議という）は、IAQG会長、各セクターリーダー、

財務管理チームリーダー、各分科会リーダー及びIAQG投票メンバーの参画により運営され、各分科会の活動方針の検討・設定等が行われる。OPC会議は資格者だけが参加できるclosed会議であるため、ここでは概要のみ記載することとする。OPC会議での主な項目については総会でも報告された。

<OPC会議>

- ・ OPCメンバーおよび今期の活動予定の確認
- ・ QMS（Quality Management System）の各活動分野（規格やOASIS運用など）に対する脅威とそれに対する戦略、活動ステータス
- ・ AIMMの状況について、特に9110規格のOverlayに関しての情報
- ・ Digital化活動として、Oasis Insightsや

Mobile Appの状況についての情報

- ・ PSCI（Product and Supply Chain Improvement）の活動状況と、SCMHの開発状況
- ・ 開発中の規格に関するステータス、認証移行のタイミングについての情報
- ・ 2025年に発足したOperational Performanceチームの活動状況の報告

(4) Standard Council Meeting

（報告者：渡辺 秀 三菱重工業(株)）

IAQG Standards Council Meetingは各セクター代表の投票メンバー27名の参加により運営され、各Standardsの全体的な健全性とパフォーマンスの管理、IAQG AISEL IPポリシー（AISEL：Association Internationale Sans but Lucratif：国際非営利団体）への整合、



Standard Council Meeting

渡辺氏（上から3段目左端：三菱重工業(株)）、陶山氏（渡辺氏の右隣：(株)IHI）、
上原氏（下から2段目中央やや右：川崎重工業(株)）

航空宇宙産業の技術的な向上、各Standards開発と保守に関するプロセスとツールの管理及び承認に責任を持っている。

今回は、以下のような議題に対して、報告及び議論が行われた。

- ・ 各Standardsのステータス/投票状況
- ・ Standardsの各国語（ドイツ語、フランス語、スペイン語、イタリア語、日本語、韓国語、中国語）への翻訳状況の説明
- ・ OCAP*適用の提案
- ・ IAQG-1 Standards Management Committeeの状況報告

なお、Standardsの各国語への翻訳に関しては、翻訳プロセス等に関し継続協議となった。

*OCAP：Organization Certification Analysis Process、組織と認証機関（CB）との間で、

組織のAQMS（航空宇宙品質マネジメントシステム）の適用範囲および関連する認証審査プログラムを決定し、スキーム内での認証に関するリスク評価を実施するための対話的なプロセス。

本要求はIA9104-1 Requirements for Certification of Aviation, Space, and Defense Quality Management Systemsに規定されているが、国内ではまだ発行／適用されていない。

(5) IAQG-1 Standards Management Committee

（報告者：陶山 修二（株IHI））

IAQG -1SMC（Standards Management Committee）は、SAE（Society of Automobile Engineers）会議として運営され、SAEの他、



IAQG-1 SMCチーム（JAQGから参加多数）

IAQGの-ISMCLリーダーシップの各メンバー、セクターリーダー及び-ISMCLとして投票権を持つメンバーが参加し開催され、規格策定に関わる方針や規格の検討状況、各セクターからの活動報告等が行われる。

今回のワシントン会議では、SAE及び-ISMCLリーダーシップ、及び各セクターリーダーより、規格の投票プロセス、このプロセスに使用されるStandardsWorks（SAEが提供するプラットフォーム）の機能改善や新機能の導入、SAEにおける規格のデジタル化の取り組み、各セクターでの規格に関わる活動状況、-ISMCLのメンバーシップ状況、各規格の検討状況などの説明・報告が行われた。特にSAEにおける規格のデジタル化の取り組みでは、規格の開発・発行にMBSE（Model Based System Engineering）プロセスを適用し既に1つの規格が発行済であること、SAE内でデジタルエンジニアリングに関するS-19と呼ばれる新しい委員会が設立されたことなどの説明があった。このS-19委員会にはAirbusや

Boeingといった航空宇宙防衛産業を中心として50社を超える企業・団体が参加している。

一方、規格の検討状況については、9100や9110、9120の他、9115や9136などの既存規格の検討状況、新しい9150規格の検討状況について説明が行われた。更に、認証機関における組織認証分析プロセス（OCAP = Organization Certification Analysis Process）に関連し、組織で適応しているIAQG規格の明確化のため認証対象外のIAQG規格全てに共通の要求を追加する方針についても説明が行われた。

a 9100規格「航空、宇宙及び防衛分野の組織に対する要求事項」

（報告者：西口 潤 三菱重工業株）

IAQG9100チームでは2つの9100規格の改正を進めている。1つ目は現行の9100規格に製品品質向上に寄与する要求事項を反映した部分改正版、2つ目はISO9001：2026版を反映する本改正版である。



9100チーム集合写真

西口氏（後列中央部：三菱重工業株）、田中氏（後列右端：川崎重工業株）

1つ目の部分改正版は、前回のIAQGバルセロナ会議で協議し、主にsub-tier（下請）管理を強化した規格案を作成。1stレベルでの投票が完了し、現在最終投票中であることが報告された。本規格は従来の各国機関からの発行ではなく、IA9100として7か国語の翻訳版（含む日本語）が同時に発行される予定である。

2つ目の本改正版は、航空宇宙独自分野として、情報セキュリティに関する要求事項を新規追加、製品安全、模倣品の防止、APQP（Advanced Product Quality Planning）、内部監査、是正対策の要求事項等を強化、及びISO9001：2026版を反映した改正である。現行の9100規格から航空宇宙独自要求を変更した調整ドラフトが2025年8月にIAQG 9100 Writingチームによってまとめられ、コメント募集の展開を実施し、190件のコメントが寄せられたものを解決・整理したものである。

IAQGワシントンDC会議に先立ち、3セクター（米/欧/亜）でそれぞれのコメントに対する処置案を協議し、IAQGワシントンDC会議でIAQGとしての最終調整が実施されたことが報告された。

2026年には今回の協議結果、及びISO9001：2026規格要求事項を反映した、投票用ドラフトが作成され、展開される予定。その後、投票で寄せられたコメントを反映し、2027年1月発行を目標として、改正作業を進めることが報告された。

b 9110規格「航空分野の整備組織に対する要求事項」およびMRO（Maintenance Repair and Overhaul）

（報告者：山本 博士（株）IHI、佐藤 幸喜
日本航空宇宙工業会）

IAQGから2名が参加。今回は8名が現地参

加、2名がWeb参加した。

まず、3つのIA9100シリーズ規格の部分改正版の同時発行に向け、IA9100部分改正案に沿ったIA9110 部分改正案を速やかに仕上げた。外部提供者への各種要求の明確化が大きなポイントとなるところ、これらの大部分が元々9110規格で規定している内容であるとの整理に至った。

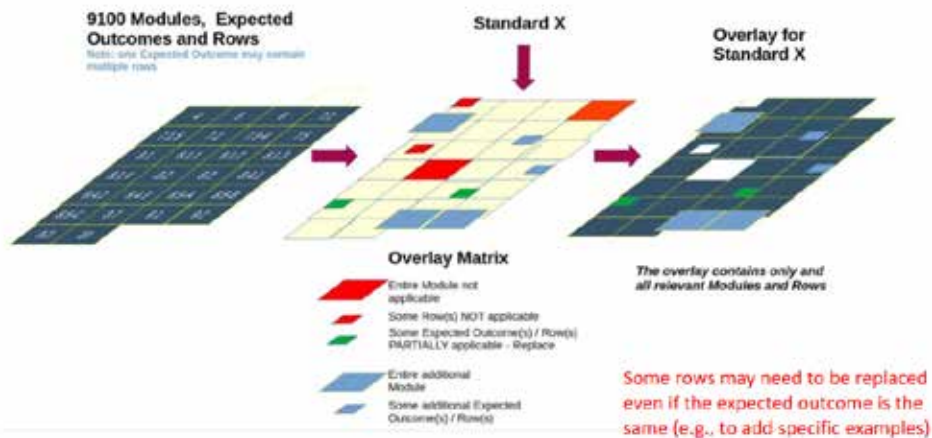
次に、AIMM（Aerospace Improvement Maturity Model：9100成熟度モデル）Overlay活動（現時点での9100増分改訂に連動した改訂：下図参照）について、9120チームリーダーが加わり、お互いのチームで前回のバルセロナ会議以降に作ってきた関連モジュールの仕上がりレベルをすり合わせた。大きなギャップはなく、9110リーダーと9120リーダーがAIMMチームへそれぞれの成果を持ち込んでAIMM 2.0バージョンに組み込んでいくことになった。なお、9110のAIMMサブチームにはIAQGの2名も参加して活動した。

続いてIA9110 正改正版の検討を開始した。次期ISO 9001改訂に含まれる可能性が大きい内容を考慮して詳細検討を進めていく中で、9110独自要求となるFPE（First Process Evaluation、MROで初めて実施する工程の評価）のSCMH（Supply Chain Management Handbook）化をすることを再確認した。IA9110正改正版の詳細検討は、今後も定期的にWeb会議で検討していくことになった。

また、この度設置されたIAQGのMROリーダーも、本9110 Writing Teamに加わり、今後世界各地域のMRO関係の政府機関や防衛機関、エアライン、MRO業者との関係を深めて、9110規格の適用推進や9110規格の内容充実を進めることを確認した。

チームの雰囲気は非常によく、エネルギーにMRO品質向上のための規格検討に係る活動を進めている。

AIMM Strategy - Overlay Concept



Overlay活動の概念図



9110 Writing Team

山本氏（右端：(株)IHI）佐藤氏（左端：日本航空宇宙工業会）

- c 9101規格「QMS—航空、宇宙及び防衛分野の組織に対する審査要求事項」（報告者：澤中 裕子 川崎重工業(株)）

9101チームの会議は、対面closedのみで3日間行われ、認証機関を含む12名のメンバーが参加した。9104-1規格を変更して認証構造の

キャンパスを復活することに関して、9104-1規格の変更案の確認と、9101規格の影響を受ける箇所のドラフト案の作成を行った。本改訂案は、認証プロセスの移行時に必要となるため、早期の規格発行を目指している。

これ以外に、



9101 Writing Team

澤中氏（前列左から2人目：川崎重工業㈱）山内氏（前列右端：防衛基盤整備協会）

- ・ 9100部分改正版への対応
- ・ 9104-1要求事項明確化に伴う変更
- ・ OASISに繰り返しの不適合の記録欄を追加したことに伴う変更
- ・ 審査報告書様式の改善

などについて協議を行い、ドラフト案を作成中である。また、9101の各報告様式のうち、OASISで自動設定する部分を、各様式に仕様として明記する案も作成中である。これらについては、今後、更に完成度を高めて、次々回の投票プロセスへと進める予定である。

また、今回は協議していないが、9150規格（Fundamental QMS要求事項）のための審査要求事項である9151規格についても検討を進めている。

今回、Intact社（OASIS開発）のCEOやプロダクトマネージャ、SC（規格評議会）ChairやSMC-1（規格管理委員会）Chairも、各トピックに関する部分では直接協議に参加するな

ど、部門横断的にスピーディに調整が進められていると感じられた。

（なお、報告者の澤中氏は今回で一旦IAQG業務から離れることとなっている。長年にわたるJAQG/IAQGへの貢献に対して敬意を表し、今後のご活躍をお祈りする。）

d 9125規格「非納入ソフトウェア要求事項」（報告者：飯山 修（株SUBARU））

9125（非納入ソフトウェア要求事項）は、9115（品質マネジメントシステム—航空、宇宙及び防衛分野の組織に対する要求事項—納入ソフトウェア）と同一のライティング・チームとなっており、2日間にわたりリモート参加も含め10数名のメンバーが参加して9115および9125について議論がおこなわれた。

9125については、最新のステータスと今後の処置事項（トレーニング等）について情報共有と話し合いが持たれた。

9115については、今後の改訂に向けたスケジュールの確認、9115改訂ドラフトに対するチームメンバーからのコメントに対する処置案の検討、改訂案の内容に対するレビュー・協議が行われた。

また9100についても、改定の最新状況とスケジュールが共有された。

(6) SCMH (Supply Chain Management Handbook) Risk Management (Safety focus)

(報告者：山本 博士 (株)IHI、佐藤 幸喜 日本航空宇宙工業会)

IAQGから2名が参加した。SCMH 7.3 Risk Managementが5年周期の見直しのタイミングで、現在航空宇宙防衛産業全体で進めているProduct Safety（製品安全）のリスクマネジメントを補強する活動になる。SCMH 7.22 SMS (Safety Management System) のWriting Teamと、SCMH 7.3 Risk ManagementのWriting Teamの合同活動である。なお、SCMH SMSチームは製品安全のモジュールを作成して、

AIMMチームへ提供済み。

バルセロナ会議直後に発行したSCMH 7.22 SMSと関連Webinar（2本）と現在のSCMH 7.3 Risk Managementの内容を、今回の検討メンバーで早急に確認することから検討を開始した。そのうえでSCMH.7.3に新たに2つの項目を立てることを決定した。

3日間の活動で、7.3.3 OPERATIONAL RISK MANAGEMENT（ORM）と7.3.4 Safety Risk Management（SRM）の骨格を作り上げた。今後、定期的なWeb会議でそれぞれの項目を充実させ、次のIAQG会議で確認・発行することを目指す。

討議の中で、現在のリスクマネジメントはビジネス視点での品質指標（納期、提供する製品・サービスの出来具合）になっているが、「安全に関する課題を認識したら、その課題解決を最優先にすべきである」との話になった。安全リスクをどう取り扱うかを明確に示すSCMH文書を作ろう、ということでメンバーの意見が一致した。

メンバーは全員が真摯に様々なリスクにつ



SCMH Risk Management (Safety focus) チーム
佐藤氏（最前列左端：日本航空宇宙工業会）
山本氏（最前列左端から二人目：(株)IHI）



9100規格におけるリスクマネジメント

いて意見を交わし、SCMHを作り上げようとする意欲にあふれている。日本、そしてアジア・太平洋地域の状況も反映できるように引き続き活動していきたい。

(7) 関係強化戦略分科会 (国際スペースフォーラム：International Space Forum)
(報告者：松根 功忠 三菱重工業(株))

スペースフォーラムは、9100シリーズ規格への宇宙固有の品質要求の反映と宇宙分野のステークホルダーへの啓発を主たる目的として活動を行っており、JAQG スペースフォーラムは、APAQGの代表として本分科会に出席している。

本会議では、宇宙関連企業に加え、主要ステークホルダーである宇宙機関（NASA、ESA、JAXA）等が参加しており、ステークホルダーとの綿密な情報交換の場として、AAQG、EAQG、APAQG各セクターの活動報告や、国際スペースフォーラムとしての活動方針等、今後の宇宙製品及びサービス保証やスキームに対する提案等の議論が活発に行われた。

APAQGからは、アジア太平洋のセクター活動として、ステークホルダーを含めた各国の活動状況共有等が実施されたことに加え、ステークホルダーとの更なる関係強化のためのプロモーション活動として、本年11月に



国際スペースフォーラム

葛西氏（前列右端：JAXA）、武内氏（前列中央：三菱電機株）、
松根氏（上から2段目中央右：三菱重工業(株)）、松井氏（松根氏の左隣：IHIエアロスペース(株)）、
栗屋氏（松井氏の左隣：日本電気(株)）

フィリピンで開催予定のAPRSAF-31（31st Asia-Pacific Regional Space Agency Forum）に向けた計画を報告した。今後もAPAQGの代表として、セクター内の宇宙業界への啓発を図るとともに活性化を推進し、当該活動をIAQGへ反映出来るよう積極的に参画していく。

(8) 認証オーバーサイトチーム（Certificate Oversight Team：COT）

（報告者：小薬 正幸（株）IHI）

COTは、航空・宇宙・防衛分野の品質マネジメントシステム認証制度の運用に必要な規格（要求事項）の制定・維持、および認証制度の世界的な運用・管理等を行っている。今回の会議では、EAQG・AAQG・APAQGの3セクターから業界（主要製造メーカー）、認定機関（AB）、認証機関（CB）それぞれの

代表者の参加のもと、9104-1移行再開に向けた状況確認、Resolution（規格要求事項を補足するルール）候補の確認、各セクターからの報告、AB/CBからのフィードバック、などが行われた。移行再開に向けた状況確認では、9100規格の部分改正も同じ移行に含め、移行の開始が2026年5月末、移行の完了が2027年1月というタイムラインが共有された。

(9) 製品およびサプライチェーン改善分科会（PSCI：Product and Supply Chain Improvement）

（報告者：高木 雄一 三菱重工業(株)）

本分科会は、製品やサプライチェーン改善のための活動支援を目的とした活動を行っている。その一つがSCMHの作成・維持であり、サプライヤが顧客の期待や組織目標を満たすための取組みについて、具体的な方法や優良



PSCIチーム
高木氏（右端：三菱重工業(株)）

事例を文書（ガイドライン）にまとめ提供している。

ワシントン会議では2025年の活動成果、進行中のプロジェクト状況確認、次年度計画策定を目的として3日間の集中討議を行った。2025年も数多くのSCMHを新たに発行でき、特に7.22 Safety Management Systemや7.20 Ethics and Compliance Case Studiesなど、現在、航空業界でも関心の高いテーマに関するガイドラインをリリースに達したことは評価に値する。

ユーザーの利便性向上の取り組みとして、IAQGのSCMHサイトが新たにGoogle翻訳機能に対応したことが報告された。ただし、翻訳の正確性に関してIAQGによる検証はされていないため免責事項を表示することなどを協議した。

今後の取り組みとして、サプライチェーン

改善により効果的なガイドラインを提供するために、OASIS Insightの監査データから指摘の傾向を分析し弱点分野にフォーカスした文書開発を進める。

“Nonconformity Deep Dive for SCMH Topics & Tools Prioritization”の一環としてOASISデータを確認しながら攻めどころを協議したり、IA9100 Incremental Revisionに対応したSCMH開発計画書を現地で完成させた。来年1月か2月頃、9100チームとの共同ウェビナーを開催することも検討。今後も引き続きSCMHの充実化とユーザー支援を継続していく。

(10) オペレーショナルパフォーマンス (Operational Performance)

（報告者：池崎 隆司（株）IHI）

チームを3つの分科会に分けて、それぞれ以下の活動を実施した。



Operational Performanceチーム

（後列中央がチームリーダーのAnne VALADEZ氏（Thales社））

池崎氏（前列中央：（株）IHI）、城福氏（前列右端：日本航空宇宙工業会）、
服部氏（前列左から2番目：APAQG事務局）

- ①Procedure 100（ガバナンス文書の管理要領）見直し
- ②Procedure 101（メンバーシップの要件と役割）見直し
- ③KPI（Key Performance Indicator）およびサーベ이의戦略検討

現在IAQGが進めているブランディング戦略では、IAQGを、地域組織の集合体ではなく、一つの世界的組織として認知させる方針であることから、メンバーシップ要件やセクターリーダーの選出方法をセクター間で共通・標準化することが提案されており、上記分科会の中で議論された。AAQGではメンバー会社はほぼ米国で占められるが、EAQGでは多くの国にメンバー会社が存在している等の組織構造の違いがあり、とりわけAPAQGでは、航空宇宙防衛産業を立上げるフェーズの国もあり、工業会のような組織が参画している状況であることが明らかとなった。このため最適な“共通化”の範囲を意識しながら検討を継続することと

なった。

規格ライティングチーム、ICOTチーム等の各チームはKPIを掲げて活動を進めていることを受けて、これらの達成状況を統一的に評価する指標を検討し、評価が低い場合には改善を促す仕組みを検討した。引き続き詳細を詰めながら規格化を進める。

従来は各チームが発出し、非効率的との指摘もあった各種サーベいは、ECよりオペレーショナルパフォーマンスが発出することが指示されているため、全体のサーベイ実施戦略を検討した。その結果、年間で発出するサーベいの件数を制限し、トレンド把握を目的としたメンバー会社へのサーベイも数年ごとに実施する方針を決定した。

上記はいずれもオペレーショナルパフォーマンスチーム内での検討結果であり、今後EC等の承認を得て実行に移していくことになる。



Civil Relationship Meeting参加者
渡辺氏（右列中央：三菱重工業株）

(11) Civil Relationship Meeting

(報告者：渡辺 秀 三菱重工業(株))

防衛や宇宙関係と同様にIAQGのアウトプット（規格/標準等）が航空局や業界団体に業界のベストプラクティスとして認識され、考慮/使用されることを目的に、キックオフ会議を実施した。

今回の会議には、ヨーロッパ、アメリカ、アジアからの代表及び防衛ワーキングGrのリーダーのオブザーバー参加で実施。1回目であり、目的の共有や各地域の状況の確認を実施。次回以降、代表のいない国へのアプローチ等の協議を予定している。

(12) コミュニケーション（Communication Team）

(報告者：服部 明子 APAQG事務局)

コミュニケーションチームは、IAQGホー

ムページ、ポッドキャスト、LinkedInなどの各種ツールを活用し、IAQGの活動を広く浸透させることを目的に活動しており、日本から2名が参加している。

今回の会議ではまず、IAQGポッドキャストのトピックについて議論が行われ、IA9100の移行、新認証規格である9150の紹介、小規模認証機関の代表や新メンバー代表へのインタビューなど、さまざまなアイデアが提案された。

また、新メンバー向けに開発中のIAQG紹介パッケージに加え、新任リーダーを対象とした倫理ガイドラインやセッションの必要性についても意見交換が行われた。さらに、IAQGのブランドを統一するためのガイドライン案の紹介もあった。今回初めて、IAQG Communications Committeeが総会時にブースを設け、IAQGメンバーに対して、完成した



IAQG Communication Committee 展示ブース

ばかりのプロモーションキットの上映やIAQGを代表して活動する際に使用できる名刺の展示・配布を行った。

(13) CB (Certification Body) Town Hall

(報告者：鈴木 淳士 (株SUBARU))

CB Town Hallは、航空・宇宙・防衛分野の品質マネジメントシステム認証制度を運用する認証機関が互いに情報や問題共有を行うことを目的として定期的の実施されている会合である。今回の会議では、9100部分改正による認証制度との関わり合いについての意見交換、運用に必要な9104シリーズ3規格及び9101規格改正の進捗状況の確認、OASISデータベース維持管理会社であるINTACT社より認証機関向けにシステムバージョンアップにおける機能追加の紹介及び今後の展開計画についての説明などが行われた。

4. おわりに

会議期間は米国政府機関の閉鎖期間と重なったが、米国入国時に多少時間を要した以

外は、ホテル周辺では特にその影響を感じることもなかった。しかし、会議の3日目に開催される恒例のネットワーキングディナーについては、IAQG事務局が予定していたワシントンダレス国際空港近くの航空宇宙博物館別館が政府機関閉鎖の影響を受け、閉館となったため、急遽開催場所を変更しなければならなかった。

この状況に対して、IAQG事務局は冷静に代替場所を用意し、無事にネットワーキングディナーは開催された。100人規模の会食会



ネットワーキングディナーの様子

場を探すだけでも大変だが、博物館内の写真を大型スクリーンに投影するなど、雰囲気も失わないように配慮されており、この危機対応能力には感心させられた。

会議期間中は終日会議が開催された。筆者自身もそうであるが、複数の作業グループに所属する人が多く、複数の会議に忙しくかけ持ちをする様子が見られた。日中は知人に会っても声をかける暇もないほどであるため、会議の合間の休憩時間やネットワーキングディナーは貴重な時間となっている。

今回の会議では9101/9104審査移行の再開の目標日程が示され、一定の進捗が見られたが、規格発行に必要なSingle-SDO（多言語の規格を同時に発行する試み）の課題となっている翻訳作業については、IAQGと各国担当機関との間で調整が進められてきた方針が会議直前に変更され、未確定な部分が残っており、日本も含めて速やかな進捗が必要である。

冒頭で述べた通り、今回の会議開催場所はワシントンダレス空港近くのレストンという

都市である。会議名称はワシントンD.C.と称しているが、ここはヴァージニア州で、ホワイトハウスなどのあるワシントンD.C.からは少々離れている。

数年前にワシントンD.C.とダレス空港を結ぶ鉄道が開業しており、会場のホテルは鉄道駅の近くにあったため、容易にワシントンD.C.中心部にアクセス可能であった。

航空関係者としてはスミソニアン航空宇宙博物館をぜひ訪問したかったのだが、米国予算未成立に伴う政府機関閉鎖の影響により閉館となっており、近くにあるリンカーン像の見学に向かった。

ここには、かの有名なゲティスバーグ演説が壁に刻まれている。すなわち、「建国の理念である『すべての人間は平等である』という原則を再確認し、南北戦争の犠牲を無駄にせず、自由と民主主義の理想を実現するために、『人民の、人民による、人民のための政府』を地上から消さない」という決意を訴えた演説である。



レストンタウンセンター
(到着日はロックフェスティバルが開催されていた)



リンカーン像とゲティスバーグ演説が彫られた壁

いささか飛躍するところ、これをIAQGに置き換えるとすれば、「航空機・宇宙機事故の犠牲を無駄にせず、航空宇宙分野の品質と安全を確立するために、『民間の、民間による、民間のための組織』として永続的に活動が続ける」という教訓に通じるものがある。

IAQGは世界標準の品質マネジメントを維持・運営・発展させることを目的としており、その活動が民間主導で推進されている意義は極めて大きい。

日本としても、IAQG活動の中核として引き続き積極的に貢献していく所存である。

〔(一社) 日本航空宇宙工業会 航空宇宙品質センター 事務局 部長 城福 隆司〕